# 1950年代における山村青年の生活記録運動

## ―山形県旧南置賜郡南原村綱木青年学級の事例―

神奈川大学　牧野修也

１目的

この報告の目的は、山村集落で生活する青年が、自分たちが生活する地域社会において、自立した個を確立するために行った青年学習運動のうち、生活記録運動に限定して、その運動の内容と意味を明らかにしていこうとするものである。具体的なフィールドとしては、山形県旧南置賜郡南原村綱木集落とし、青年の学習運動の場としての青年学級で行われた生活記録運動を報告の対象とする。

生活記録運動を取り上げる理由としては、次の２点を挙げることができる。一つは、周知のように、戦後の農地改革は山林には及ばず、山村においては、依然として戦前期以来の地主小作体制が継続し、戦後の「農村の民主化」がもっとも遅れていたと思われる地域社会での青年の実践であること、もう一つは、当時の青年団活動の活動方針が、「レクレーション集団としての青年団」なのか？「青年の生活向上を目的とした運動体としての青年団」なのか？という方針の行き詰まりの中で、山形県青年団を中心とした生活記録運動に取り組む中で、青年団活動の方向性を見いだそうとしたことである。そして、この時期の青年学習運動が、１９５０年代後半以降の農民学習運動に繋がっていったと見ることができることである。

２方法

そこで、本報告においては、報告の対象である綱木青年学級が残した文集の内容を分析するとともに、青年学級の指導者であった小学校教員が記した文章、青年学級関係者へのヒアリングから、青年学級における生活記録の意味について明らかにしていく。

３結果

その結果、綱木青年学級での生活記録運動においては、一人の小学校教師の存在が大きいことが明らかになった。その教師には、①「閉鎖的」地域権力構造の打破②山村を変貌させる独占資本の収奪の構造化による地域破壊への抵抗が必要であるという地域社会認識があり、その認識の実践の延長線上に青年学級が位置づけられた。そのため、青年学級の内容も、通信制高校の補習的位置づけから自分たちの地域社会の構造的把握と認識を行うことができるようになることが重視されるようになっていった。そして、学習の成果としては、女子や次三男が置かれている社会状況や産業資本の山村への進出によって、自分たちの生活がより苦しくなっていくだろうことを認識していくことになった。そして、家や村だけではない生き方の模索や構築を図ろうとする者たちも出てくるようになった。しかし、その一方で、旧来の山地主－山小作関係の関係が明確に意識されることにもなり、そのことは、青年学級に対する「距離感」を、青年たちの間にも生み出すことにもなった。

学習の成果としては、次三男や女子に対しては、「新しい生き方」の指針をある程度示すことができたことが挙げられる。しかし、家に跡取りとして残らざるを得ない長男に対しては、明確なものを打ち出すには至らない部分も多く、その点については未解決の問題として残ったままであった。そして、製炭業や林業の不振とともに、生活の場としての綱木集落の存続も難しくなっていった。

参考文献：　近藤康男編 1953『貧しさからの解放』中央公論社